

『東方』 二七六号より

術数理論と中国のパラダイム

吾妻 重二（関西大学）

一

『易』は複雑な書物である。戦前、京都の研究者の間に『易』と『説文』は研究してはならぬという格言があったそうであるが、その意味するところは私にもわかる気がする。両書とも多義的な内容をもつために、明確な結論を実証的に導き出す――すなわち「研究」をおこなう――のが困難である、というのであろう。今ではさすがにこのような物言いはなくなつたようで、両書の「むずかしさ」はかなり軽減されたけれども、しかし、手強いというイメージは依然として残っていると思う。

『説文』研究すなわち文字学についてはさておき、『易』についてその「むずかしさ」をいえば、まず、経文すなわち卦辞・爻辞の意味するところがひどく難解なことが挙げられる。いったい何を言おうとしている占辞なのか、判然としない場合が多いのである。

次に、象数の理論が背後に存在することが『易』のもう一つの「むずかしさ」となっている。『易』は単なる占辞の集合体ではなく、六爻からなる卦画を伴っている。この卦画のかたち（象）と、卦画のさまざまな数理的組み合わせ（数）、すなわち「象数」が、特異な理論をかたちづけているのである。しかも、その象数理論は、漢代頃から天文律暦学と交錯して複雑さを増幅させているのだから厄介である。

もちろん、『易』のもつ右の二つの困難を解決するため

辛賢著

『漢易術数論研究――馬王堆から『太玄』まで』
A5判・二五八頁・汲古書院・七、〇〇〇円



に、これまで多くの研究が積み重ねられてきたのも事実である。このうち経文に関する研究としては、高亨や本田清氏に代表される訳注があり、我々はこれらによつて卦辞・爻辞の意味をかなりの程度明確に知りうるようになった。一方、象数の理論についてであるが、こちらの研究はたいへん少ないのであつて、鈴木由次郎氏の労作『漢易研究』（明德出版社、一九六三年）がほとんど唯一の手がかりであつた。

辛賢氏のこの書は、右の二つめの問題、すなわち象数易の理論の解明にいどんだ力作である。著者は韓国の出身で、本書は筑波大学に提出された博士論文がもとになっている。

まずは本書の目次を示しておく。

序論

第一章 六十四卦の「数」と「理念」

第二章 孟喜・京房の卦氣六十四卦構造

第三章 京房の八宮世応構造

第四章 『太玄』の八十一首七百二十九賛

結語

著者の研究の出発点となったのは前述の鈴木氏の研究であつたが、鈴木氏の仕事は完成度がきわめて高い。新たな成果をうち出せるかどうか著者が途方にくれたのも当然だつたであろうが、馬王堆漢墓の帛書周易が著者に突破口を開くことになる。この新資料の解説をきっかけにして、著者の研究が本格的に始められたのである。そして余勢をかつて、漢代における易学を視野に収め、前漢術数学の帰着点というべき揚雄の『太玄』にまで考察が及ぼされることになる。本書副題に「馬王堆から『太玄』まで」というゆえんである。

まず、序論では本書の目的、および構成と方法が簡潔に述べられる。第一章では「帛書周易」「阜陽漢簡周易」「秦漢婦蔵」の三つの新出土資料について紹介したのち、通行本と帛書本の六十四卦に見出される数理が検討される。

第二章では、漢代象数易の発端をなしたとされる孟喜・京房の六十四卦三百八十四爻の配列構造が論じられる。すなわち孟喜と京房の卦氣説が詳細にわたつて検討される。

第三章では、第二章に引き続いて、京房の理論が考察される。すなわち八宮世応説および納甲説が、独特の積算法にもとづいていることが明らかにされている。

第四章では、『太玄』の数理的構造が「三」と「九」を基本定数にした、前漢易学思想の集大成というべき内容を

トップページにもどる

もつことが論じられている。

二

本書の中で多数用いられる数式と図表、専門的な易学用語などについて紹介する紙幅がないのは遺憾といふかな。ここでは、私がとりわけ感心した五つの点を、かいつまんで述べることにしたい。

第一は、『易』の通行本と帛書本のいずれにも数理的構造が存在することを解明した点である。まず通行本は、

上経 乾、坤、屯、蒙……坎、離（全三十卦）

下経 咸、恒、遯、大壮……既濟、未濟（全三十四卦）

という構成をとっている。一般にこれは、いわゆる反卦と対卦をペアにして配列したものと考えられてきただけで、なぜ上経に三十卦、下経に三十四卦という不調和な配分になっているのかほとんど注意されることがなかった。ところが著者は卦の配置の中に一定の規則を見出して、これが必然的な配分にもとづいていることを見事に論証する。一方、帛書本が通行本とは別の卦序をとっていることはつとに注目されてきたが、著者はこれまた精密な論証を通して、通行本とは別の「八卦重卦説」を規則的に発展させたものであることを明確化する。

つまり、通行本にせよ帛書本にせよ、『易』の六十四卦の卦序は偶然の配列ではなく、整合的な数的規律に裏づけられていることが明らかになったのである。

第二に、右の発見は、『易』という書物の本質にかかわる重要な意味を含んでいる。なぜなら、『易』は成立当初から厳格な数理的規律を備えていたことが確実になったからである。象数易的思考は漢代に生まれたという通説は誤りであつて、『易』の書にもとから備わっていたのである。

いいかえれば、卦爻辞を哲学的に解釈する「義理易」と複雑な数理を駆使する「象数易」とは、いずれも『易』の本質だったことになる。

第三は、帛書本の検討によって、『易』の数理的思考が後世においても連綿と継承されていたことが明らかにになった点である。旧説では、漢初には義理易が盛んで、前漢後期の孟喜・京房に至って象数易学が起ったとされてきたのであるが、それが正しくないことが証明されたわけである。いいかえれば、『易』——帛書周易——孟喜・京房という、象数易学の太い線がはつきり浮かび上がったのである。

第四は、孟喜および京房の卦気説の解明であって、六十四卦を十二月・二十四気などの時節に配当する卦気説につき、二人の説の共通項と相違点を指摘している。ここには、京房の卦気説が孟喜の単なる継承ではなく、当時の四分暦と密着した構造をもつことがよく示されていると思われる。

第五には、積算法による納甲説の解明が挙げられる。京房の納甲説は、そこに干支を乾・坤・艮・兌・坎・離・震・巽の八卦に当てはめる難解な説であって、そこに特別な法則性は存在していないかのように見える。たとえば乾の場合、六爻には次のような配当がなされる。

乾 ䷀

上 五 四 三 二 初

壬戌 壬申 壬午 甲辰 甲寅 甲子

さらに他の七卦についても同様に干支が配されるのだが、しかし、なぜこのような配当でなければならないのか、これまで誰にもわからなかった。ところが著者は積算法を

トップページにもどる

使って、納甲説の配当に一貫した法則があることを見出したのである。この積算法は前述の鈴木氏でさえお手上げだったものであって、疑いなく本書の貢献といえるものである。

以上、本書の顕著な特色について略述したが、それにしても、本書を通して強く感じるのは、著者が象数易（術数）の複雑な理論に根気強くとりくみ、背後にひそむ数理構造を解き明かすのに成功した、ということである。これは著者の並々ならぬ力量を物語るものにほかならないであろう。

なお、本書はきわめて高度かつ専門的な内容をもつため、注意深い読みを必要とする。このほか、図表の説明にややわかりにくいところがあるが、それは私の理解力不足のせいかもしれない。

三

このように、本書は象数易学と『太玄』の数理を含む術数学について、重要な発見と見解を示したものである。そもそも術数学は、中国の古典文化にとって不可欠の意味をもっている。なぜなら、術数学が中国の学問全体の根源の一つをなしているからである。

周知のように、郭店楚簡六德篇の発見によって、『詩』『書』『礼』『楽』『易』『春秋』のいわゆる六芸が、遅くとも戦国時代には成立していたことがほぼ確実になった。『易』は儒者のみならず、おそらく知識人全般の必須の教養書として早くから機能していたのであって、そうであれば、当然この頃には象数学の理論も広く学ばれていたに違いない。

もちろん戦国時代には、まだ六芸の位置づけに関して系

統だった解釈は見られないが、漢代になると『易』の存在が突出しはじめ、ついに六芸全体を統べる地位を獲得することになる。劉歆の『七略』に、『易』が仁義礼智信の徳目の源流として不変の価値をもつのに対し、他の五芸の学問はこれに対して時代ごとに改変する、というのはその象徴であった。劉歆の生きた前漢末は象数易学の全盛期であり、彼のいう『易』が象数易にもとづく術数学を含んでいたことは疑いをいれない。そして、劉歆のこの六芸規定が『漢書』芸文志に受け継がれて、その後の中国の学芸の大枠をかたちづくるわけである。

本書は鈴木由次郎氏の仕事をいくつかの分野で確実に越える研究である。本書と鈴木氏の二書は、術数学の位置づけを論じた川原秀城『中国の科学思想——両漢天学考』（創文社、一九九六年）とともに、今後、象数易学を含む中国術数学研究の必読書となることであろう。漢代以降の術数学や他の領域に与えた影響など残された問題も多いが、まずはこれらの仕事をよりどころにすることで、中国思想のパラダイムを究めていく一つの道が拓けていくと思われるのである。

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる